

ひとは〇〇する動物である—あなたはどうか規定しますか—

前々回の編集後記にちょっと書きかけていました。

ひとと動物を分かつことは何か、という意味で（あるいは動物性からからも規定されるという意味も含んで）「ひとは〇〇する動物である」という規定があります（註1）。この「〇〇する」に、或る論者は「言葉を使う（話す）」を措き、別の論者は「道具を使う」を措いて来ました。

ひとと動物の違い

最初に詞の定義から。動物的・生物学的規定の「ひと」には‘ヒト’をあて、「人間社会を形成する個人」としての「ひと」には‘ひと’をあて、世人とかハイデggerのダス・マンとか謂う意味での「ひと」には、‘人’‘世人’（註2）を当てます。

わたしたちの同世代人でコピーライターのようなフレーズで注目を浴びた経済（文化）人類学者の栗本慎一郎さんは「ヒトはパンツをはいたサルである」と規定していました。ですが、むしろ、サル—動物は他の種を殺したり・食したり・同種での争いも起こすのですが、それは食物連鎖や自らの子孫を遺すという種の「本能」のようなことで、ひとはそのことから外れて、同種での殺し合いをするのです。

廣松さんの規定—「ひとは役割行動をする動物である」

さて、わたしが哲学的論攷で参考になっている、廣松渉さん（註3）は、「ひとは言語を使用する動物」以前に、「役割行動（役割期待—役割遂行）する」というような規定をしています。勿論、役割行動というのは、サルの毛づくろいやマウンティング、哺乳動物や鳥の信号的呼応にもあるのですし、チンパンジーが小枝（という道具）を使って巣穴のアリを釣り、「自己—他己」認識しているような手話（という言語）を使えたりします。ただ、言語を使い、役割行動の中で、道具を使ったり、言語を使う中で役割行動を高次化していくという他の「動物」には見られない行動様式を採ります。ですから、そのことを、廣松さん自身がそういう文を残しているか、確認し得ないのですが、わたしなりに定式化すると「ひとは言語を使い道具を使いそこにおいて劃断階性をもつ役割行動する動物である」となります。

ファシストたちの規定—「ひとは差別をする・戦争をする・殺し合いをする動物である」

さて、今世界で、ファシズムとその蠢動たる右派ポピュリズムが台頭してきています。右派ポピュリストたちは、まだ「人権」ということや反差別で、そのことを頭から否定することはありません。また、「人権というのは架空の概念だ」という、非論理性で批判してすませようとしたりもします（註4）。ですが、極右＝ファシストになると、「人権」否定に踏み込み、差別を正当化します。このひとたちとは、そもそも論理性で議論になるのかどうかは判りませんが、そのひとたちの思想を、この「ひとは〇〇する動物である」にあてはめてみると、「ひとは差別をする・戦争をする・殺し合いをする動物である」となるのではと推測できます。

ここまで行くとおそらく対話不能になるのですが、それでも敢えて「ひとは変わりうる」として対話を求めていくと、そういう考えで行くと、「汝、殺すなかれ」とかいうキリスト教的十戒をも破戒することになります。わたしは、理論的には反差別であり、反暴力主義であり、死刑制度にも反対するのですが、それでも、むしろ差別性を引きずっていて、むしろ根は右翼的体質であり、そこから抜け出せていないので、思わず、「そういうひとたちは、無人島に集まって殺し合いをして、絶滅して欲しい」と念ってしまうのです。

わたしの規定（提起）①——「ひとは社会を形成する動物である」

あらぬ妄想のようなことを書いてしまいましたが、ちゃんと理論的な論攷に戻し、わたしの「ひとは社会を形成する動物である」を書いてみます。

今西錦司さんというダーウィン進化論との対話の中で、独自の「今西進化論」といわれることを形成したひとが、それまでの「社会を形成するのはひとだけである」という常識や科学的論説を覆すような「動物社会」「生物社会」という概念を突き出しました。これは廣松理論の動物にも役割行動があるということとシンクロ（共振）しているのです。

蜂や蟻の生殖の人間社会から見る「女王」的にとらえられる「分業」のような「超個体的個体」というようなこともあるのですが、それでも、食物連鎖や遺伝子を残すというような、ところでの競争があるとしても、それでも「社会」を形成しているのです。

まして、言語使用というところで、高次化した人間は、「社会を形成する動物」なのです。

わたしの規定（提起）②——「ひとは協働する動物である」

廣松さんの「ひとは役割行動をする動物である」という規定から、廣松さん自身も内容的に展開しているのですが、共時的（社会的）・通時的（歴史的）協働に留目しつつ、「ひとは協働する動物である」という規定が出てきます。障害差別規定に「（身辺）自立」という概念があります。公務員の採用規定に、「自力通勤・自力勤務ができること」ということがあり、未だその規定が活きているようなのです。ですが、そもそも誰が「自立している」のでしょうか。今、労働作業にパソコンやそれに類することを使用することなしに労働が成り立たなくなっています。そのパソコンを自分で作ったのでしょうか？ 交通機関を利用して通勤するのでしょうか、それを自分で作ったのでしょうか？ 自家用車通勤にしても、それを自分で作ったのでしょうか？ そもそも、生きる為に食事をするのですが、食べ物を調理はするにしても、その原材料を自分で作ったのでしょうか？

わたしの規定（提起）③——「ひとはコモン（共有財）を形成する動物である」

最近日本でも広く語られるようになった「コモン」という概念は、水道事業などのインフラを公から民に移し、それで上手くいかなかったことから、再び、公すなわちコモンに移すという世界的動きの中で、語られているのですが、ひとの協働的連関態で形成されたことをコモンと押さえ直す作業なのです。わたしは、「廣松共同主観性論」を押さえる中で、「ひとは共同主観的動物である」という規定をしにかけていたのですが、これだと役割行動の苦手にする「障害者」に抑圧的な言辞になると、取りやめました。そこで、いろいろ考えている中で、そもそも、「個々の能力」とされていることが物象化（註5）されてい

ることで、それはそもそも「人」が協働的連関態で通時的・共時的に形成・蓄積したこと(財)を、いわゆる「社会化」の中でインプットして分掌していることではないかと押さえて得ました。そこから、「ひとはコモン(共有財)を形成する動物である」という規定が出てきます。現在の、ひとは記憶することをインターネットに任せることもできるように成っていますし、生成AIなるものが出てきて、考える事もインターネットに任せることができるようになっていきます。勿論、そこで起きてくる情報操作の恐ろしさがあるのですが、ひとのなすことは自己表現的活動とひととひととの関係をどう取り結んでいくのかということになっていくのです。そこで、「障害者」当事者のわたしは、その存在自体で周りを突き動かすことができる「障害者」がこそが、新しい社会の水先案内人(パイロット)である規定をも提起したいのです。勿論、すべての被差別者(註6)が、その自ら受ける被差別を止揚する運動の中で、水先案内人として登場してくるのです。

(註)

1 まさに、動物として規制されるヒトと言語を獲得する中で役割行動を能為・能動的に高次化して動物性から脱していくヒトという弁証法なのです。

2 (註3)で書いている廣松渉さんはこれにも‘ヒト’を使っていることがありますが、この‘ヒト’は多くのことが、生物学的‘ヒト’として使っているのもので、区別化する必要があると思っています。

3 廣松さんは多くの「廣松〇〇論」ということを生み出しています。「廣松物象化論」「廣松四肢構造論」「廣松事的世界観」「廣松役割理論」……。本文中や別註でもすこし書いていますが、任に余る感もあるのですが、一度まとめてみようと思っています。

4 具体的に展開しないと意味不明になるので名をあげますが、自民党の片山さつき議員の発言です。実は、わたしもキリスト教文化圏の「天賦人權思想」批判で同じようなことを言っているのですが、わたしは、それに替わる「反差別」という概念を突き出しています。人權思想を右から否定すると、嘘とペテンで塗り固める極右にしかならないのですが、少なくとも論理性は持ち合わせている右派の議員は、「人權思想」を否定してファシズムを招来させてしまうのでしょうか？

5 「廣松物象化論」は「廣松差異論」でもあるのですが、その核心は実体主義批判です。「実体—属性」という近代知の地平からする実体主義は、協働的連関態で形成されたコモンたる能力の、「個人」へのヘーゲルのいう「内自有化」、廣松さんのいう「内自化」なのです。

6 これはマルクス理論の最新版的ネグリ／ハートが『<帝国>』の中で展開している「マルチチュード」という概念や、グラムシやそれを援用したG・C・スピヴァクの「サヴァルタン」の概念からのとらえ返しができます。マルクス派は、プロレタリアートを来たるべき革命の主体として押さえていたのですが、プロレタリアートも被差別者の中に、圧倒的マジョリティとして含まれるのです。そもそも、階級問題と被差別問題を分けたところから問題が混乱を来しているのです。階級問題とは、生産手段の所有からの排除と「労働力

の価値」という二重に物象化された「労働能力」を巡る差別問題なのです。

(み)

(「反差別原論」への断章)(111)としても)